

2011.3.11 東日本大震災

仙台市立中野小学校へ避難した 600 人の人達と
過ごした 24 時間



(600 人余りが避難した仙台市立中野小学校)

蒲生町内会 片桐 勝二

私は60数年生きていた中で、これまでは何度となく大きな地震は体験してきたが、昨年3月11日(金)の東日本大震災のような、大地を大きく揺るがす大地震と、あのどす黒い大きな波が押し寄せ、すべてものを流し去った大津波は、これまでの私の記憶にはない。

大地震は、私たちの住み慣れた地域を壊滅状態とし、それぞれの人たちの大事な家族や家族との思い出、そしてこれまで長年にわたり築き上げたすべての財産までも失い、生き方までも変えてしまった。

あの恐ろしい体験をし、自分自身の人生観をすべて変えたしまったあの日から、1年4ヶ月ほど過ぎ、今、私自身の心も落ち着き、冷静に昨年の3月11日(金)の地震発生当時から、中野小学校へ避難し、仮二次避難先(霞の目駐屯地)へ移るまでの24時間余りを自分なりに振り返ってみた。

今後、再び発生が予想される大災害において、若い世代にこのような災害に遭遇したとき、自分たちが何をすべきか、どのような行動をとるべきかを考えてもらおうと思い、ここに、自分が行った行動を、書き残すことにした。

震災当日の3月11日(金)は、仕事が休みだったので自宅でのんびり過ごしていた。10時すぎに自分の実家に行き、母親と兄嫁とお茶のみしながら午前中を過ごした。昼食は自宅に戻り食べた。(このとき、二人とのお茶飲みが、最後になろうとは思っていなかった。)

家内が勤務先の中野小学校から戻り、昼食後に二人でテレビを見ながらのんびり過ごしていた。14時46分に体に大きな揺れを感じた。家の中の家具は左右に大きく揺れ、テーブルの上にあった小物が飛び散り始めた。茶の間の大きなガラス戸を開き、はだして外へ飛び出し揺れの収まるのを待った。

揺れはなかなか収まらず屋根瓦が落ち始め、家の中に居た家内はテレビを両手で抱え、大声で助けを求めているので表に引っ張り出し、直ぐに中野小学校へ向かうように指示した。

そのときに、緊急防災無線からの避難指示の放送があったかどうかは、今はほとんど記憶に残ってはいない。

私は蒲生二丁目界限の人々に中野小学校へ避難するように大声で叫び、呼びかけながら自転車で駆け巡った。

自宅近くの小野さん宅に立ち寄ったところ、おばあさんが家の中で転倒して足を痛め動けなくなっていたので、小学校へ避難途中の家内や近くの工場の従業員たちに、小野さんのおばあさんを背負って避難するように頼み、再び呼びかけに向かった。

自宅前の道路でおろおろしている人や犬を抱きかかえながら立ちすくんでいる人、庭先で呆然としていた人などを多く見かけたので中野小学校へ避難するよう呼びかけ、私も急いで小学校へ自転車を走らせた。

中野小学校に着いてみると、自分の足で走って避難してきた人達や、自動車で避難してきた人

達、トラックの荷台に載せられて搬送されてきた人達などが数多くいた。自動車で避難してきた人達がかかり多く、校庭内には多くの自動車が駐車してあった。

昇降口で、小学校に続々避難してきた人達に校舎内へ入るように呼びかけを行っているときに、町内の知り合いの若い男性が、蒲生町内に留まって人達を迎えに行ってくると声を掛けながら、トラックで再び蒲生町内へ向かった。

(その若い男性とは二次避難先の仙台市立八軒中学校で、元気な姿で再会することができた。)

小学校の二階へ上がろうとした時に、入口付近で呆然と蒲生町内を見つめていた高齢者などに、立ち止まらずに、二階の教室や屋上へ上がるように呼びかけながら駆け上がった。

二階に行ってみると、小学校の児童たちは帰宅せずに各教室に避難しており、廊下や屋上への階段の踊り場などには、地域や周辺の工場・事務所の人達であふれていた。

二階の廊下や職員室内で、蒲生町内会や他の町内会の役員の方々など、多くの知り合いの人達の無事な顔を見つけることができ、多少ではあったが安堵感を覚えた。

職員室では、校長先生や西原町内会長などが緊急防災無線で消防署と連絡していたが、なかなか連絡が取れずにいらだっていた。必死に連絡を取ろうとして緊急防災無線のマイクと向き合っていた。

そんな中、鈴木蒲生町内会長は2年前に町内会で作成した『住民台帳』を大事に抱きかかえながら避難してきた。

(鈴木町内会長が大事に持ち出した『住民台帳』は蒲生町内の方々の安否や消息確認に大いに役立ったと共に、その後、分散して避難生活を送っている蒲生町内の方々と連絡を取り合うのに大いに活躍してくれた。)

伊藤議員も着の身着のままでも小学校へ避難してきて、避難してきた多くの人達に励ましの声を掛けながら元気づけていた。

あの大きな揺れからどのぐらい時間の経過はわからないが、職員室の中から「津波がきているぞ」と大きな叫び声が聞きこえた。教室にいた児童や、廊下や階段付近にいた人達に屋上に避難するように大声で叫びながら校舎内を駆け回った。中野小学校の先生方や各町内会の役員の方々、避難してきた近隣の工場に勤めている若い人達などと協力し合いながら、互いに大声で叫びながら屋上へ駆け上がるよう誘導をした。

避難の際、多くの人達が、悲鳴や泣き声、そして大きな叫び声を出し、あわてふためきながら屋上へ駆け上がり、指示に従っていた。高齢者・怪我された方や障害を持った方々には、手助けするなどをし、お互いに協力し合ったので、幸いに屋上への避難するときには、転倒事故などの二次災害は無かった。

屋上へ避難した私たちが、どす黒い津波が押し寄せ、すべてのもの破壊するあの情景を見たときに、地震の恐ろしさと、津波のすさまじさに言葉も出なかった。

七北田川を見たとき、津波の2波か3波のいずれかと思うが、引き潮によって川底が見えたとき

には血の気を失うような怖さを感じた。



(津波が七北田川の上流に向かっていている状況)

屋上から見た蒲生町内や港町内の情景は、太平洋と七北田川から流れ込んだどす黒い波によって一変した。これまで長年にわたり住み慣れ、数多くの思い出やそれぞれの思いの詰まった多くの住宅は、跡形もなく無残な姿に壊され、どす黒い波が漂う海に数多くの家屋や自動車などが流されていた。



(津波が七北田川の防潮堤を超えて蒲生町内に濁流が流れ込んだ)

屋上のフェンス越しから津波の押し寄せる状況を見ていた人達は悲鳴や泣き声や悲痛な叫び声をあげた。落胆する姿の人達が多くいた。

避難した人達が、近くの人と互いに声を掛け合いながら、慰め合ったり、励まし合ったりしている姿を屋上の所々で見かけた。

徐々に気温が下がり始め、雪が降り出し、寒さが身にしみるようになり、避難していた人達は肩を寄せ合いながら寒さをしのいでいた。

小学校の西側に数件の住宅が流されずに残ったが二階部分まで完全に水没してしまっていた。屋上を歩きながら周囲を見渡していたときに校舎と体育館との間に流されてきた人を見つけ出したので、校舎内の消火栓から消火用ホースを取り外してロープ代わりにし引き上げて救助を行った。

小学校の西側の住宅の中に4人の人達を取り残され流されていた。幸い、学校側へ押し流されてきたので、励ましの声をかけながら避難していた若者達と協力し救助することができた。

津波で押し寄せた泥水で、中野小学校の一階は完全に水没し、二階の床まで浸水した。しばらく水位が下がらず、中野小学校へ避難した我々は、完全な孤立状態に置かれた。



(蒲生町内が完全に水没し、中野小学校へ避難した 600 人余りの人達が完全に孤立状態になった。)

東側の廊下に、濁流の激しい勢いで押し流された住宅が衝突し、廊下の大きな窓が壊れ、泥水が流れ込んだ。

小学校の西側にあった鉄工所付近から、大きな爆音とともに火柱が上がり工場が燃え始めた。その火の勢いは避難していた小学校へ押し寄せてくるのではないかと感じた。

屋上から、時々二階へ降りて泥水の様子を見に行き、水位が下がるのを待った。

二階の廊下付近にいた人から水位が下がり始めたとの叫び声が聞こえたので、直ぐに、様子を見に下りたら、廊下には泥水や泥が流れ込んでいたが、外から家屋の残骸や瓦礫、自動車等は流されてはこなかったのが幸いした。

廊下に流れ込んだ泥の厚さもあまりなく、歩くと若干ではあったが足をとられる程度で、片付け

作業に支障きたすことはなかった。

避難していた多くの男性、小学校の先生方や高学年の児童たちに一緒に手伝ってもらいながら、泥は両端へ、散乱した窓ガラスは集積するなどして広い通路を設けた。

(その作業を行っているときの、中野小学校の高学年の児童たちの積極的な行動に、目を見張るものがあり、自分の心の中に感動すら覚えた。)

作業をしている間、避難していた人達には、雪が舞う寒空の屋上で待機してもらった。

二階にある各教室内は机を窓際に寄せ、広いスペースを設けて椅子を整然と並べて休息室にした。和室や放送室は、校舎内にあったほとんどの座布団を敷き詰めゆったりできるような休息室とした。

各教室に設けた休息室を地区ごとに分けた。健康な人や小学校の児童達には各教室の休息室、和室や放送室に設けた休息室には、高齢者や乳飲み子を抱えた親子などに入ってもらうことにした。ゆったりと休んでもらおうと思ったが、多くの人だったので、かなり窮屈な状態となった。

近くの工場や外部から避難した人達などには理科室などに入ってもらうなどして、全員を入室させ、時々揺れる余震に怯える中で、肩を寄せ合い、互いに励ましあうなどして休んでいた。

中野小学校の先生方や各町内会の役員の方々と一緒に職員室に戻り、動揺した心を鎮めるように椅子に腰を下ろした。

若干の休息をとった後、職員室で今後の対応策を話し合った。小学校の先生方もこれまで経験したことのない大災害に、驚きと恐ろしさを感じ、ただ呆然とした様子だった。先生方は誰も一言も話すことなく、ただ黙って椅子に腰を下ろしていた。

西原町内の大和田会長が再び、緊急防災無線で仙台市の対策本部と連絡を取り始めた。

中野小学校へ避難した方々の安否や消息情報を発信できるように、避難した方々すべての人に、小学校の先生からペンとコピー用紙を貰い受けて、地区名と氏名を記入してもらって人数を掌握した。

中野小学校へ避難した人数は小学校の児童が150名、一般の方々が約450名で合わせて、600名余りだった。

時間の経過とともに、寒さと空腹に襲われ始めた。小学校の防災用の備蓄倉庫を調べたら、飲料水と非常食用のアルファーマイ・ろうそくなどが備蓄されていたが毛布等などの寒さをしのぐものはなかった。

そして、蒲生町内の鈴木さんや千田さんなどの婦人防火クラブの方々がリーダーとなり、数人の女性の方々に飲料水とアルファーマイを使用しておにぎりを作った。避難していたすべての人達に配った。避難していた人達は、時間の経過とともに厳しくなる寒さに耐え、小学校西側の工場の火事で大きく燃えさかる炎が近寄る恐ろしさを感じながら、食べていた。

(あのあわただしい状況の中で、婦人防火クラブの方々が作ってくれた、冷たいおにぎりの味は、一生忘れはしないだろう。)

避難している方々の多くが休息室の中で、時々おこる大きな余震や、小学校の西側の工場の火事で燃え盛り押し寄せてくるような炎に身の危険を感じていた。遠方にある仙台市ガス工場の

火災で、大きな爆音が聞こえる中で、西原町内の下山さんをはじめ、多くの若い方々が各部屋を回りながら、避難していた人達の気持ちが混乱しないよう励ましの声を掛けたり、元気付けたりしていた。さらに、冷静な行動を取るよう声がけをしてくれた。

二階のフロアーには、トイレが2箇所あったが、避難した人達の使用する回数が多く、さらに暗がりを使用するために汚れが目立った。避難していた若い人達が誰に言われることなく、学校にある備え付けの掃除用具を使い掃除を行ってくれた。

職員室の緊急防災無線の前で仙台市の対策本部の担当者と何度も連絡を取り合っていた西原の大和田町内会長から無線で交信が取れ、小学校での避難状況を伝え、早急に防寒用の毛布を搬入するように依頼したとの連絡を受け、屋上でヘリコプターが来るのを待った。

大きな爆音を立てながら自衛隊のヘリコプターが小学校の屋上上空に近づき、毛布の入ったダンボール箱数個を投下してくれた。

投下後、ヘリコプターは上空でホバーリングしながら待機し、自衛隊の隊員が降下し、小学校の中での避難状況や避難している人数や怪我された人、体調を崩された人などの有無を確認し、基地へ戻って行った。

その後、1時間余りで札幌消防署のヘリコプターが小学校上空へ到着し、ホバーリングしながら、怪我された人や体調を崩された人、体に障害を持った人・高齢者など約30数名を十数回にわたり、苦竹駐屯地の病院に搬送を繰り返した。

屋上から怪我をされた方々をヘリコプターへ搭乗させるにあたっては、港町内会の佐々木さんなどが校舎の出入り口で列を作り、励ましの声をかけるなどして、搭乗がスムーズに行えるように自衛隊隊員と協力し合いながら誘導を行ってくれた。

(搬送された人達の中に、震災直後、自宅で足を痛め動けなくなっていた小野さんも含まれていた。後日、杖を使いながら元気に歩く小野さんと5月末の町内会主催のイベント会場で1年3ヶ月ぶりに再会した。)

投下された毛布は各休息室で避難している人達に配られ、その毛布にお互いに身を寄せ合い、寒さをしのぎながらわずかな時間だが眠りについた。

3月12日(土)、翌朝、東の空が白々と明け始める頃、屋上へ上がり周囲を見渡すと、蒲生町内や港町内の姿が一変していた。東側の防風林の松林は無残に押し倒され、町内のすべての家屋が破壊し、地域のシンボルであった日和山までもあのどす黒い波によって押し流され、形や面影までも無くなっていた。

七北田川に目を向けると、昨日の荒れ狂ったあの川の流れから、穏やかな流れに変わり、川の中に壊れかけた住宅や自動車や瓦礫が数多く流されていた。数年前に蒲生町内側の堤防に設置された防潮堤は大津波に耐え抜いた。小学校の正門東側にある地藏尊から数メートル先の堤防が大きくえぐり取られ土砂が川へ流されたが、わずかに残された堤防は決壊もせず、大量の泥水が小学校へ流れ込むのを防いでくれた。

(中野小駐車場の東側堤防沿えに鎮座していた地藏尊が、小学校へ避難した多くの人達を守ってくれたものと信じている。)



(七北田川の堤防決壊を防ぎ、中野小学校へ避難した 600 名余りの命を守った地藏尊)

対岸の堤防は一部決壊し、水田に多量の泥水が流れ込んでいた。

昨夜から燃え続けていた小学校西側の工場は、消防による必死の消火活動によって鎮火し、白い煙が立ち上がっていた。

我が家の方へ目を向けると、長年にわたり住み慣れ思い出が数多く詰まった我が家、自分が生まれ育った実家が無残に、跡形もなく壊れ、姿形もない状況となっていた。言葉を忘れ、ただ呆然と見つめていた。

校庭には、津波によって壊された多量の住宅の残骸や瓦礫、無残な姿に変わり果てた自動車が折り重なりあっていた。

朝日が昇る東の空を見上げると、オレンジ色に染まる太陽が、霞にかかり薄ぼんやりと輝きながら蒲生の町を照らし始めていた。

(目の前の無残な姿と化した町並みを見つめていると、英知のある人間が、自然の多大な驚異の力によって打ちひしがれ、人間が自然との戦争によって大敗したことを痛切に感じさせられた。)

二階の各休息室で、避難していた人達のほとんどが、時々あった余震などに怯えながら一睡もせず一夜を過ごした。

夜明けと共に、避難していた人達は屋上へ上がり、目の前に映る校庭に積みあがった瓦礫の

山や、無残に変わり果てた我が家や蒲生の町並みを見つめ、呆然とする人、鳴き声とも悲鳴ともわからない声を出している人、泣き崩れ近くの人に支えられている人など、悲しみとも諦めとも取れない姿が数多く見受けられた。

その後、避難していた各町内の役員の方々や若い人達と共に、一階に下り、校舎の外へ出るための通路を確保するために、廊下や階段の土砂や泥水を除去し、支障となる瓦礫の残骸を撤去すると共に、歩行しやすいように板などを敷き並べ、校庭から堤防に上る箇所にはスロープを設けるなどの作業を協力し合いながら行った。

日が高く昇るとともに、親戚、知人又は、友人などが安否や消息確認のために徐々に中野小学校へ集まりはじめ、知り合いに屋上から手を振る姿、互いの安否や消息を確認することができ手を取り合って喜ぶ姿、他の親戚や友人・知人の消息や安否の確認が出来ずに肩を落とす人の姿も多く見かけるとともに、一緒に次の避難先に移動する人達も出はじめた。

小学校の教頭先生は早朝に学校へ戻り、避難していた先生方と学校の被災状況や児童の健康状況や安否を確認し、各休息室にいた児童たちに励ましの声をかけていた。

安否や消息を確認に来た人達から、自衛隊が徹夜で国道 45 号の福田町から中野コミセン間の七北田川の堤防上に通行の妨げとなっていた家屋の残骸や瓦礫を取り除き、道幅は狭いが車両の通行が可能となったことの連絡を受けた。車両の通行は中野小学校や高砂中学校からの避難者の輸送のためのバスだけ通行できるとのことであった。

自衛隊のヘリコプターは小学校付近の堤防上に、数回にわたり着地を試みた。着地が可能か否かの判断ための確認作業を行い、堤防上に降下し移送態勢を整えた。1回当りの移送人員を、10名程度とした。

避難した人達に、他の人達が混乱する恐れがあるので勝手な行動をとらないように注意を促し、避難した人達の全員を屋上に集めた。高齢者、乳飲み子を抱えた親子、児童、健康な人達は各地区別に分かれ、整然と整列した。

中には安否や消息確認に来た親族や友人・知人又は会社の同僚たちと一緒に、小学校から徒歩で離れて行くグループの姿も見かけた。

中野小学校からの二次避難先がどこなのかわからないまま、随時、屋上へ避難していた人達は、仙台市の路線バスと自衛隊のヘリコプターとに分かれて、混乱することなく次の避難先へ移り始めた。

そのような中で、中野小学校の校長先生が小学校の児童だけは一般の人や親達と別々にし、避難・誘導については仙台市教育委員会で作成した災害時のマニュアルに従って行うと言われた。このような状況の中で、親子一緒に避難させるべきだと再三にわたり、申し入れたが拒まれ、先生方が先頭となり児童達を引率し、中野コミセンへ向かった。

(二次避難先である仙台市立八軒中学校へ教頭先生が、親御さん達の安否と消息の確認に来られたときに、親と児童を別々に避難させたことによって、中野小学校の先生方が、市内に設けられた多くの避難所を全員で手分けしながら駆け回り、安否や消息を確認するために、多くの時間

を費やし、離れ離れになった親子を引き合わせるのにかなり苦労されたことを話されていた。)

小学校へ避難してきた方の中に、ペットの犬と一緒に避難して来た方が何人かいて、ペットをの犬を抱きかかえながら次の二次避難先まで連れて行きたいと懇願されたが、「こんな非常時の中で、人の命と犬の命のどちらが大事なのか考えてほしい」と話し、ペットの犬の飼い主に判断を委ねた。

二次避難先への移送が始まり、それぞれの避難先に到着した人達から、路線バスで移送された方々は仙台市立工業高校の体育館へ移り、そのまま二次避難先での生活が始まったとの連絡があった。

中野小学校から徒歩で次の避難先に移動した人達や、仙台市の路線バスで仙台工業高等学校へ避難された人達が、その後どのような避難生活を送ったのか、わからない状態となった。

自衛隊のヘリコプターで移送された人達からは霞の目駐屯地の体育館で一時休息を取ってから、若林区内にある小・中学校の二次避難先に向かうとの内容の連絡があった。

中野小学校に避難した方々すべてを、それぞれの避難先へ送り出した後、最後まで校舎内に残った小学校の教頭先生と女性の先生と港町内の佐々木さんと私の4名が校舎内のすべてを見て回り、残っている人がいないことを確認してから自衛隊のヘリコプターに搭乗し霞の目の駐屯地へ向けて飛び立った。

霞の目の駐屯地に向かう上空のヘリコプターから眼下に広がる情景は、明け方に中野小学校の屋上から見た情景とは大きくかけ離れ、我々の住む中野地区の散々たる被害の大きさに驚くとともに、ヘリコプターの移動に伴い、岡田地区や荒浜地区の変わり果てた姿に言葉を失った。

霞の目駐屯地に到着後、私たちより先に中野小学校から移送された方々と合流し、駐屯地の体育館内で若林区の担当職員から避難者名簿の記入と、非常食が配られた。

体育館内を見渡すと、他の地域などから、かなり多くの人達が避難して来て、足の踏み場もないほど混雑していた。

中野小学校で私たちと共に、最後まで避難誘導活動を行っていた教頭先生と女性の先生と再会することを約束し、二人の先生方を霞の目駐屯地から送り出した。

身体を休めようと横になったとき、若林区の担当女性職員が来て、直ぐに二次避難所へ移動するよう指示された。

余りの早急な移動指示に驚きとともに、多少ではあるが怒りを覚えながらも、地震の発生時から中野小学校での緊迫した避難状況を説明し、避難してきたほとんどの人達が一睡もせずに疲労困ぱいしているので、移動は13日に延ばして欲しいと懇願し、了解を得た

他から避難した方々で混雑していた体育館の二階フロアで、それぞれが寝床を確保し、身体を横たえ、朝方まで眠りに着いた。

13日の朝9時過ぎから3台の路線バスに分乗し、若林区内の3箇所に設けられた二次避難所に移り、私は仙台市立八軒中学校で約1ヶ月間の避難所での生活が始まった。



2011年4月10日(日)
 八軒中学校の北校舎二階で約1ヶ月の避難所生活を送り集約避難所となった宮城野体育館に移動する朝の様子。
 八軒中学校吹奏楽・合唱部は、「あすという日が」「あの鐘をならすのはあなた」などを歌い、見送った。



あれから1年4ヶ月余りの時が過ぎ、振り返ってみると
 昨年3月11日(金)に遭遇した、東日本大震災の恐ろしい非常事態の中にもかかわらず、蒲生町内の方々を中野小学校へすぐに避難するよう大声を上げながら避難を呼びかけた。
 津波が押し寄せ孤立した中野小学校では校舎内に避難した多くの方々と協力し合いながら、校舎に避難した人達を励まし、元気付けた。
 しかし、多くの方々は余震や身内との連絡とれずに不安を感じながら重苦しい空気の中で暗黒の一夜を過ごした。
 3月12日の朝方から知人や友人が訪れ、それぞれの避難先や避難所へ向かった。中野小学校へ避難された人達を、全員を無事に最後まで送り出し、見届けることが出来たことが本当によかった。

今になり、数年前から何度か開催された4町内主催による防災訓練に積極的に参加し、避難方法並びに救助方法や避難所の運営方法などを学び、そして長年勤めていた建設会社での安全に関する教育や知識が血肉となり、今回の、東日本大震災での中野小学校での避難・誘導や避難活動に生かされたと実感している。

『 避 難 』

逃げろ ！

逃げて、生きろ ！

必死に逃げて、生きろ ！

後ろを振り返らず、必死に逃ぎって生きろ ！

逃げきって、生きたら、ゆっくり振り返れ！

何もなくても、身一つあれば、

そこには、やるべきことがある。

そこには、やらなければならないことがある。

上がれ！

上がって、生きろ ！

必死に高台へ上がって、生きろ ！

下を見ないで、ただ必死に高台へ上がって、生きろ ！

上がりきって、生きたら、ゆっくりと下をみろ ！！

何もなくても、身一つあれば、

そこには、やるべきことがある。

そこには、やらなければならないことがある。